

---

# 渚の決まった時間 エスキース・「サーフィン」

日野成美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

渚の決まった時間 エスキース・「サーフィン」

### 【Nコード】

N86610

### 【作者名】

日野成美

### 【あらすじ】

《特別な瞬間》に、渚にやってくる、朝・昼・夜??それぞれ  
の《彼ら》。  
若手女性カメラマン・ナミの何度目かの《特別な瞬間》のエスキース。

テーマは「波にのる」。

フリーペーパー発行会社で派遣社員として働く、女性アマチュアカメラマン・主人公「わたし（ナミ）」は、《特別な瞬間》を迎え

ていた。

冬の、みぞれの渚。昼、夜、そして朝の、《彼ら》のサーフィンと、アドバイス。

やがてまた、「わたし（ナミ）」はステップを上がり……。現代  
幻想短編小説。

(前書き)

登場人物

- ・「わたし」(佐倉ナミ) 主人公。アマチュア女性カメラマン。
  - ・《朝》マルーメル 天使。海藻のような深い緑の瞳。
  - ・《昼》スス 南国の少年。南の海の青緑の瞳
  - ・《夜》サチ 煙草の少年。草色の緑の瞳。
- ?? ? uria様に捧ぐ。

どんよりと綿埃のような黒い雪雲が、渦を巻いて海を荒立てた。びゅうびゅう寒風、体を斬りつける。みぞれが降るらしいですよおと、出しなに、仕事場の女の子は言っていた。やめといたほうがいいですよお、海に行くなんて。高波がくるかもしれないんだから。しかしわたしは、お弁当をオフィスのレンジで極限まで温めるとこの渚の、この場所にやってきたのだった。

海の家のおそばの、丸太の流木。缶コーヒーの自動販売機がすぐ後ろにある。

この場所。

《彼ら》と決めた場所。

特別なときに、《彼ら》は定刻通り、やってくる。

お弁当は、保温バッグに入れたおかげでなんとか、あつたか弁当状態を保持した。炒飯と小松菜のおひたしと卵焼き。開封と同時に時々刻々と冷却されていく昼食を、丸太に腰掛けてぱくつきながらわたしは渚を眺めた。確かに、波が高い。白い泡飛沫が、こっちまで飛んでくる。十メートルくらいだけ沖の岩に波が砕けて、また遠い向こうの波頭で波が弾けて、そっちの岸でも波がうねって、腹の底からとどろくような音を立てる。オフィースンの海の家、錆びたトタン屋根が、風に思い切り殴られて、びいーん、と、楽器のよな音を立てた。

空きつ腹に、炒飯もおひたしも卵焼きも残らず全部おさまった。アラジンの赤いチェックの魔法瓶に入れてきた熱い紅茶を飲んで、一息つく。ちらちら何度か腕時計を見た。コートにマフラーに、手袋もしていたが、頬が切れるように寒いのだ。

まだか……まだか……まだか……まだか……まだか……  
六度目、時計を見た。カチン、と針が十二時半を切った。  
わたしは、ぱっと渚に目を転じた。

と、波間からいきなり、すすけた色の肌をした、黄色いパレオ（南国の巻きスカート）をまとった少年がおどりでてきた。くるりくるりと、波の上で回る。わたしは目をみはった。サーフしているのだ。冬の日本の灰色の海で、カナリア・イエローのパレオ。チョコレート色の肌。

わたしはコートのポケットから、ライカ・カメラを取り出して、続けざま、シャッターを切った。そのコントラストを、動きを、写し取った。灰色、白、黒、茶色、黄色。こういう風がある日は、砂ぼこりなんか飛んできて、レンズを痛めるから長く撮れない。七八枚ほど撮った後、ライカ・カメラをポケットにおさめた。

やがて少年は、サーフボードを岸につけると、ボードをかかえて、じゃばじゃばと砂浜を上がってきた。片手をあげて合図して、しっかりとこちらへ向かってくる。

「冬なのに、よく寒くないね」

「寒いよ」

声をかけると、少年は平然と言った。

「海の中のほうがあたたかい」

少年が丸太に座ると入れ替わりに、わたしは丸太から立ちあがる。ポケットの、赤いちりめんのがま口から百二十円出して、自販機であつあつのカフェ・オレを買った。タオルハンカチにくるんで、少年に渡す。

「あらかじめ買っておけばいいのに。来る時間が決まってるんだから」

「買ったての方が、冷めないじゃない」

あつい缶カフェ・オレを受け取りながら、少年は肩をすくめた。

「でも、ありがとう」

昼の十二時半は、この南国の少年が担当だった。朝と昼と夜、決

まった時間に、私は《彼ら》に会えるのだった。

?? 《特別な瞬間》だけ。

「本当に大丈夫？ 冷えない？ タオルとかもってないの？」

「流水？ っていうのが見えるところでサーフしたこともある。平気だよ。僕の島の子供は、ある年齢になると、流水をみつけて、それを自分のサーフボードにして遊ぶんだ。競争だけじゃなくて、漁もするんだよ。上手く潮に乗れば、近くの島にだって行ける」

彼はサーフボードを抱き寄せた。長さはそれほどなくて、荒削りの平たい流木だった。彼の肌の色によく似ていた。缶のプルトップを開けながら、ぽつりと彼は呟く。

「僕は一番、波に乗るのが遅かった」

「とてもそうは見えない」

「一番下手とは言っていないじゃないか」

屈託なく少年は笑って、ハンカチにくるまれたホット・カフェ・オレに口をつけた。

「仕事はどう？」

「相変わらず」

「僕が来たってことは、何かしら問題があるってことだよな」

わたしは、思わずむくれた。

「相変わらず」

膝を抱き寄せる。波がかなり高くまできている。あと七〇センチも足を伸ばしたら、くつが水にひたってしまう。

「流行の記事ばかり追って、それにつきはぎして、顧客のクレーム受けて……」

それからわたしは、仕事の愚痴を述べ立てた。

わたしは、写真が撮りたかった。

けれども現場になかなか回してもらえない。回してもらえたとしても、自分の望む写真が撮れない。内容的にも、質的にも。

そんなことを十五分もしゃべったろうか、少年は、ふいに、口を開いた。

「波に、上手く乗る方法を知っている？」

それから、チヨコレート色の肌と、南国の海の色の瞳をいきいきと輝かせて、灰色の荒れた海に、手を泳がせた。

「潮流を読んだり、ここだ、っていう波の飛沫を見分けたりするのもあるんだけど……何よりも、ボードの上で、バランスをとることが肝心なんだ。あとは、波の流れにまかせるんだよ。陸の人たちがする、自転車とかスキーとかと、同じ。たがいにコントロールしあう。対話する。相手と、自分。すると、するすると気持ち良く、波に乗れるんだよ。容赦なく、海は僕たちを乱舞させる。海は？？特にこういう日は、とても気まぐれで激しいから、波長に乗って、さからわないで、バランスをとって、エンジョイするんだ」

「エンジョイ？」

わたしは少年の言葉をリピートした。

「そうだよ」

少年は真珠みたいな歯をむきだしにして笑った。

「たいしたことないんだ。君はあせっているだけなんだ。波に乗れなくて」

「それって、社会の波に？ それとも、わたし自身の波に？」

「それだけ気づければ十分だよ。ごちそうさま！」

それだけ言っつて、空の缶と、巻いていたタオルハンカチを私に押し付け、少年はぱつと渚へ駆け出した。まるで、早く海に還りたいかのように。ぱしゃぱしゃと軽く波をけたてて、それからサーフボードでクロールしていくと、さつと立ち上がる。少し高い波の上で、くるり、と反転しざま、彼は消えた。いつものように？？海から来て、海から帰る。

わたしはしばらく、少年が消えた海を眺めていた。少しして、携帯が鳴った。会社の同僚から、戻らないけどどうしたのかというメールだった。あわてて身の回りのものを片付けると、走って渚をあとにする。

一度だけ、透明に伸びてきた波を、ぱちゃりと蹴立てた。

ぬり込めた闇の中を、みぞれが降り出した。

アスファルトは、ぼたん雪も混じって、しゃりしゃり言った。私は完全防備だった。ハラマキにホツカイロ、マフラーに手袋、毛糸の帽子、コート、ブーツ、傘。白い外灯の灯りの下を、斜めに降りしきるみぞれ。きゆうつとおなががすいた。

何故、こうまでして、寒さに身を縮めて海に向かっていているかと言うと、理由があった。

七時半に、夜の担当の《彼》があらわれるのだ。渚で。

とても丸太の約束場所まで行く勇氣はなかった。というより、砂にずぼりずぼりと足がはまるのだ。そこで、コンクリートになっている外灯の下で、やや遠くでやや近くの、荒れ狂う夜の嵐の海を眺めていた。

今日は、勤めているフリーペーパー出版の会社の些末時に追われた。誤植とか、レイアウトとか、急に入ったニュースとか、顧客からのクレームとかに。

こういうとき、自分のやりたいことにかまけている暇がなくなる。ごはんのためだ。そう割り切りたい。けれど割り切れない自分がどこかにいる。かといって、このまま身一つで飛び出せるかと言ったら、世間様は甘くない。このみぞれみたいに。

思いふけて、いつのまにか、ぼつと海をながめていた。荒れ狂う海は闇が暴れているようだった。時折稲光が差した。外灯のオレンジに、白いみぞれが、雪片をふくんだ重い水が、ばたばたばたばた、斜めに降り注いだ。

ぼつんと、いつのまにか、隣に煙草の灯があった。はっと気づいて顔を上げると、高校生くらいの、緑の瞳をした少年の、まだあ

どけない細面があった。口の端に、煙草が挟んであった。

「よう」

日本の学ランを来た背の高い少年は、傘をさしているらしい。あ  
いかわらず、煙草はピースを吸っているようだ。学ランの胸ポケット  
から、パッケージがのぞいている。

傘の陰で、少年はにっ、と笑う。

「何、ぼうつとしてたんだ」

「海から来るのかと思って」

「アホか。それは昼のススの管轄だろ」

と、少年は、昼間の南国の少年の名前を呼んだ。

荒れ狂う海は美しささえ感じられた。カメラを持ってくればよか  
った。《夜》担当の少年は、カメラのフラッシュを嫌うのだ。

「サチ君は、さ」

わたしはふいに、夜の《彼》の名前を呼んで、たずねた。

「サーフィンとかしたことがある？」

「なんで？」

怪訝に煙草の少年は訊ね、それから、ああ、と得心したように、

「スス？」

と、昼間の《彼》の名前を呼ぶ。

それから、少しだけ海の方へ足を踏み出した。

「ススは海と一緒に育って、海に属して生きてる。俺は違う。俺の  
瞳<sup>め</sup>の緑は草の緑だ」

ぐるんと顔をわざわざこちらに向けて、彼は自分の目を指差した。

それからまた、ふっとみぞれの渚へ目を転じる。

「海、か……泳いだことないな」

「こんなに近くに海があるのに？」

「俺、育つたのここじゃねえし」

サチ、という《煙草の少年》が、各地を転々としているというの  
は、前に聞いた。どうやら彼だけが、《特別な瞬間》の三人の少年  
の中で、なんといったらいいか、ゲンジツセカイに近い人間らしい。

ふっ、と緑の瞳を空に向けた。

「あいつは……したことがあるのかな」

あいつ。それが誰を指すのか、わたしは最近、だんだん見当がつき始めてきた。それは多分??

「あんた、なんか、言いたそうだけど」

サチが振り向いた。ピースの二本目に、百円ライターで点火する。  
「ああ」

わたしは、胸の内をぶちまけた。ほとんど、昼間ススに話したことばかりだ。あんまり長いので、途中でサチは三本目の煙草にうつった。

ススの言葉を伝えると、ククツと少年は笑った。

「そうだよ、あんたはあせているだけだ。俺もそうだけど。結果が見えないからやきもきしてるんだ。だから煙草なんか吸うのさ」

「わたしは煙草吸いません」

「いつそ、海で泳ぎでもすれば、楽になるかなあ」

けれども、彼が決してそれをしないことを、彼も、わたしも知っている。なぜだろう、わたしは、知っているというより、感じている、だ。

なぜだろう??

紫煙を吹き出しざま、サチは振り返った。右手に、煙草を垂らしていた。

「なら、行動すればいい。自分のやっていること、思っていること、アウトプットすればいい。あんたの場合は、ほら、写真だろ?? 今の世の中、ネットで世界はつながってるじゃないか。ネット・サーフだよ。ほら、ブログとか」

「ブログ……」

「パソコンないの??」

「仕事で使ってるだけ。家にはない」

「電器屋とか、今では携帯電話のサービスセンターなんかにも売ってるぜ。俺は自分のを持ってる。父親のおさがりだけどさ??」

それから、パソコンの話をしているうちに、三本目の煙草の灯が、根元にさしかかっていた。夜の煙草の少年は、三本目の煙草でここを去ってしまう。

「もう行く。じゃあな？？あいつらに、あいつに、よろしく」

それだけ言うと、彼はぱつと消えた。そばから、煙草の灯も、煙も、匂いも、人の気配も温もりも消えたのを感じた。彼の消え方は、煙草の煙が空気に融けるのに似ている。吸い殻が三つ、濡れた砂浜に落ちていた。

わたしは重く湿った砂を踏んで、帰途についた。

帰りにお金を引き出して、電器屋でパソコンを買おう。行動に移そう。エンジョイ、するのだ。それから今日の晩ご飯は、味噌煮込みうどんだ。この骨の髄まで冷えきってしまったのを温めるには、腹の底から温めるしかない。

3

乳色の雲が、北東へ向かっていくのが見えた。海の間こうへ。嵐のあとの、夜明けの光景だ。みぞれの嵐を運んだ雲は去った。まだ残っている、風で伸ばされた雲の合間からほの朱色の朝の空が見える。

徹夜明け、だった。サチと別れた後、電器屋さんで、マッキントッシュのノートパソコンを買った。ざっくり七万円近くとられたのは痛い。回線の手続きなんか面倒で正直わけがわからなかったが、幸いにも、家に帰って、念願のパソコンを開くと、無線LANが使えた。近所のどこかから発信されているらしい。きちんとこちらの環境が整うまで、使わせていただくことにした。

サチに教えてもらった通り、メール、写真の取り込み、インターネットなんかをやった。広がる電子世界をサーフィンしているうち

に、いつのまにか夜が白んでしまった。六時になってしまふ。《朝》担当の子が、渚に来るのだ。

わたしはあわてて新品のパソコンを閉じ、ちりめんのがま口とカメラをコートに突っ込んで、渚に向かった。

強風・波浪注意報は、さっき解除されたらしい。砂浜は見事に波に洗われていた。自販機にくつついた、濡れ砂と貝殻をハンカチで払って、私は朝専用と銘打ったあつい缶コーヒーを買って、飲んだ。さて、約束の六時になった。わたしは空をあおいだ。朝の《彼》は、空からやってくるのだ。つむじ風が、髪を巻き上げた。

見つけた。白い服に、白い翼の、栗色の髪が、私の頭の真上で、ひいらり、ひらりと風に踊っている。

「マルーメル！」

私は驚いて、缶をにぎりしめたまま、天に向かって叫んだ。海藻の緑色の瞳をした天使は、くるりと振り返って、微笑んだ。無邪気な、少年と言うより、子供といった方がいい感じの天使だ。

『おはようございます』

「おはよう……何してるの？」

『風で遊んでいるんです』

「サーフィン？」

《朝》担当の《天使》マルーメルは、遠目にもぱつとわかるほど顔を輝かせた。

『そうです！ 翼で風に乗って、宇宙そらをサーフするんです。こつこつうふうに??』

そう言った瞬間、びゅうと吹いてきたつむじ風を、翼にのせて滑空した。白いツバメみたいだ。

しばらく天使の舞に見とれていたが、やがてわたしは口をひらいた。

「ねえ、マルーメル？」

『なんです?』

「世界は広いと思う?」

『ええ』

「でもわたしは、ある一点にとどまったままなの」

声にある硬さを感じ取ったのか、天使は空から、ふわりと舞い降りてきた。砂浜に降り立った背丈は、私よりも低い。光がこごつてできた体。光でできた栗色の髪は、風とは関係なしに、ゆるやかになびいている。海藻のような、深い緑の瞳。

わたしはまくしたてた。

「お金を得るために、夢が遠ざかっていくのが、すごく嫌だった。それに結局、わたしはこの街から出られない。パソコンを買ってね、気づいた。どんなにネットで世界をサーフしても、実存するわたし本体は、ここにどどまったままだって」

『そんなことありませんよ』

おしとどめるように、やわらかく天使は言った。くちびるが、珊瑚のようなやわらかい赤だ。

『体だけが自分じゃありません。知覚できる精神が、知覚できない無意識が、すべてがあなたです』

そつと胸に手をあて、それから、わたしに手を伸べる。天使相手に、人間のわたしは、ほうっ、と力が抜けてしまった。

わたしは神様を、特別信じるわけじゃない。でも、この天使とは仲良しだ。メールアドレスというこのあどけない天使は、わたしの心のしこりを、ほんわかと、ときほぐしてくれるのだ。

ふいに、その天使の顔にかけりがさした。

『でも……ぼくは……』

その表情に、わたしは、あっ、と声を立てそうになった。

?? あいつは………したことあるのかな。

(似てる。やっぱり。)

しかし、その考えが口をつく前に、天使がゆつくりと語り出した。『ススと、サチは、あなたに、焦ってると言ったんですよね。でも、今のあなたは、次のステップに進んでる。きちんと、着実に』

そして《天使》メールアドレスは、ひとこと、ひとこと、こめるよう

に、告げた。

『あなたは、あなたで、いいんです』

わたしの心にとある確信が根ざした。《彼ら》に逢えなくなる？  
《特別な瞬間》が終わってしまった。

《特別な瞬間》??彼らは、わたしが何かのステップを上げるや  
きもきしているときに、あらわれるのだ。断続的に、これまで何度  
もあつた。

「また逢える?」

心細さから、思わず訊いていた。

《彼》はちよつと緑の瞳をみはり、それから頷く。

『ええ。ぼくも、ススも、サチも??みんな』

そういうと、マルーメルはフワツと羽ばたいて、浮かび上がった。  
また風が強くなりだしたので。

『風に乗ってきますね!』

天使は地上に言葉をおいて、さあつと宙に舞いあがる。  
それをぼんやりとながめながら、わたしは思っていた。

(乗ってみよう。)

社会の波だつて、ネットの波だつて。なんだったら、海の波だつ  
て乗ってやる。

??逆らわないで、バランスをとつて、互いにコントロールしあ  
つて。エンジヨイするんだ。

??自分のやっていることを、アウトプットすればいい。

??すべてが、あなたです。

わたしはコートのポケットからライカ・カメラをとりだした。中  
身がまだ少し残った缶コーヒーを砂浜に突き立てて、嵐の去つた天  
空の朝風に舞う天使の残像に、シャッターを何度も切つた。

《了》

(後書き)

お読みいただきありがとうございます。筆者日野成美です。

この小説は、Amebaブログでフォトブログを展開なさっている、urria様の写真からインスピレーションを受けて書き始めました。

渚と、海、空の写真。

やわらかくて、透명한視線。

こんな写真に似合いの作品が書けたらなあ、と、思っていたのでした。

?????? urria様の写真が見られるサイト??????

blog、「こちよいスペースへ」 <http://ameblo.jp/aihirogaru/>  
web:「Ailovecreation 好きをかたちに  
- <http://ailovecreation.jimdoo.com/>

????????????????????????????????

この作品は断片で、本編を只今執筆中です。

最初の《特別な瞬間》を、今、書いています。連載形式になると  
思います。

これからもごひいきに、そして、あなたの《特別な瞬間》にも、  
だれかが、側にいてくれますように。

ではまた、近いうちに。ネットの海でお会いしましょう。

??  
筆者曰野成美  
拝

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8661o/>

---

渚の決まった時間 エスキース・「サーフィン」

2010年11月12日17時48分発行